



| ヘッドラインニュース

和平之花紫金草が館内で満開



南京大虐殺生存者陳桂香さん死去

南京大虐殺生存者陳桂香さんが3月5日にお亡くなりになり、享年99歳。



△2011年、陳桂香さんが日本証言集会に参加

彼女たちの力

3月8日国際婦人デーに、1937年南京で難民たちを救助していく勇敢な女性に敬意を捧げ。

ミニー・ヴォートリン

ヴォートリンさんは1886年にアメリカイリノイ州に生まれ、1912年イノイ大学教育専門を卒業後中国に渡った。1919年に金陵女子大学教育部主任に就任、南京大虐殺の際、彼女は国際赤十字会南京委員会委員および金陵女子大学難民収容所所長として、万人以上の女性と子供を守った。



△ヴォートリンさんと同僚たちの集合写真(前列左から四人目)

マリー・ツィネム

中国籍に加入した金陵大学の外国人教員。1937年12月、マリーさんは国際赤十字会南京分会の委員を勤め、難民収容所で勇敢に中国女性を犯したい日本兵を追い払った。



△ヴォートリンさん(左)、ツィネムさん(右)と赤十字会のお粥工場のスタッフたち



イヴァ・ハインズ

ハインズさんは1872年に生まれ、1912年中国に渡り、1924年から鼓楼病院で看護師を勤め始めた。南京大虐殺の際、彼女は鼓楼病院に唯一の外国人看護師だった。



△ハインズさんは両親が殺された戦争孤児にミルクを飲ませる

ヘッドライ

清明節:欠席のできない追悼式

清明祭前日の4月3日、南京は小雨に見舞われた。南京大虐殺犠牲者清明祭が当館の嘆きの壁の前で行われた。南京大虐殺の幸存者、遺族、日本の友人、各国の学生代表ら60人以上が参列し、厳かな雰囲気の中で犠牲者を追悼した。



日本友人の松岡環さんは1988年以来、南京大虐殺の真相を広めるために尽力してきた。参列する彼女は「侵略戦争と南京大虐殺の過ちは繰り返してはならない。悲しい歴史をより多くの人々に伝え、平和を祈る活動を続けるなければならない」と語った。



歴史の記憶を語り継ぐ者には、若い人たちが増えている。パングラデシュ、イラン、イエメン、アフガニスタンらの国からの留学生たちは、幸存者の子孫や中国人留学生と対衝した。異なる国籍にも



同人譜合

易经与国学

4月2日は南京光華門で銃死した易安華将軍の誕生日である。虞庚撫事件の後、1937年8月10日の夜、易容室は密使を率いて上海駿路に向かった際、副官に頼んで別れの手紙を妻に送った。手紙には「不滅精神、誓不生還、國將不復、何以報汝哉吾妻存」と妻を離縛しない限り生涯もしないと誓い、国をなげたければ家を持つこともできぬ。私が妻によると、これまで手紙、気持を指すを受けて

1937年11月、上海の陥落を受け、中国軍は南京に退避した。12月から南京城の敵空襲が始まり、日本軍が光華門、金華門、龍虎門の各門を爆破した。12月12日、光華門は陸地側の石垣と陸地側、虎門の山門は陸地側と水際で爆破されたため、光華門は三度に亘る攻撃を受けることになった。激戦の中、易軍は武器と右翼を失しました。守備隊たちは何度も何度も敵をかき遣しながら戻らうとしたが、彼らは八九軍の中国人軍人、国民党軍人、失業者でできていることを許さない。己の死生は己の生死、陸地の存亡と存するか止めるかは、畢竟、最後の敵空襲で軍車が55枚の荷物を受け、壁屋から危に下し、37歳で亡くなった。



当館SNS「Nanjing Memorial」にフォローしてください

3月中旬から4月上旬は紫金草の開花シーズンになる。FacebookとTwitter(X)のアカウント「Nanjing Memorial」で、外国人見学者に平和の花を楽しんでもらおうとのメッセージを発信したところ、ネットユーザーから「いいね」企画して貰ってありがとうなどのメッセージが多数寄せられた。これからもフォローしてください。



心の声

4月6日の朝、元在中国ドイツ大使のフォルカー・シュタンツェル博士が当館を訪れ、展示館の結びの所にある「平和の壁」の前で長い樹立ち止まっていた。「ここに来ると、とても悲しく思う。世界中のもっと多くの人々がここに来て、見てほしい」と語った。



イタリア人エンジニアのアンドレアさんは訪問後、「南京大虐殺については以前から知っており、それは人類史上の残酷な暴行だ。これらの深刻を見ると、とても悲しい気持ちになる。記念館は戦争の歴史と残酷さを実感できる所、とても意義のある場所だ」と語った。



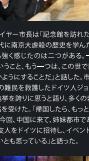
ドイツのディーダーフルト市長が当館を訪問



周峰雄長の案内で来賓が「南京大虐殺史実展」を見学した。ドイツ人のジョン・ラーベ氏の銅像の前で、周峰長がラーベ氏と南京市民との間に80年以上にわたる友谊を紹介し、ラーベ氏の御廟へ



また、ドイツ人のガール・ギンター氏は当時、江南セメント工場を営業し、デンマーク人のヘルン・ハル・シンドベーグ氏と共に難民区を設立し、2万人以上の中国人難民を保護した。



ドイツのバイエルン州中央部のアトムタ然公園内に位置するディーネーフル市は、「ヨーロッパ初の中国人街」として知られ、その歴史は中世にまで遡る。第二次世界大戦後、同市の住民はバイエルン州「中国人」として認識的につながるようになり、2015年



55

イベント

5月27日午後、アメリカ人チャールズ・ヘンリー・リッグス氏（Charles Henry Riggs）の孫孫らが南京を訪れ、リッグス氏が生前に中国政府から授与された「宋玉勲章」を含む貴重な歴史資料8点（セット）を記念館に寄贈した。「宋玉勲章」は87年前、リッグス氏が日本軍の暴行を阻止し、中国人難民の保護と貢献したことを物語っている。「宋玉勲章」の寄贈は当館にとって初めてのことである。



当館館長周峰（右）からリックス氏の孫スティーブン・ハンキンさん（左）に寄贈証書を贈呈



リックス氏の孫スティーブン・ハンキンさん（左）と
ダービート・ハンキンさん（右）

5月18日の国際博物館の日に、記念館で「平和のために—フランス人画家クリスチャン・アロ（Christian Alou）油絵展」が開幕した。展示は「南京の虐殺の叫び」ボリュームで描いた南京」「中国と世界の絆」の2部分、合計44枚の油絵を展示し、中仏両国人がが歴史を語れず、和平を大切に、未来大切に想くことを表現している。同年3月18日、展示の準備中に、ボリューム急病で倒れ、65歳の生涯を開いた。当時は彼の最後の願いを完遂させた。



ボリュームの娘さんが画展に参加

第29回世界図書デーには、記念館のロードショーホールで「記憶の声のパートナッチャ」活動が行われた。南京大虐殺の歴史記憶の継承者、当時の歴史教育担当、紫金草ボランティアなど11人の代表が「ラーベの日記（青少年版）」の一部を朗誦で読み上げ、感想を話し合った。



「ラーベの日記」を読み上げる五人の代表

寄存者の情報

南京大虐殺生存者の劉素珍さんは、4月21日に93歳でこの世を去った。刘さんは1931年11月生まれ、3歳の時に父を亡くし、祖父母と一緒に南京市珠江路吉兆胡同に住んでいた。1937年に南京大虐殺が起った時、劉さんはまだ5歳で、日本軍に熱湯で右脚をやけどさせられた。



劉素珍さん（右）の生前の写真

今から86年前の1938年4月10日、米国カリフォルニア州サンタバーバラ市で出版された「クラスマート」は、「オートリージ日本」と詳しく紹介した。南京大虐殺の間、アメリカ人のミニー・ウォートソン氏と中國人の程慶芳氏、金陵女子聖学院を守るために南京に居住していた。どちらにかかっても、AIを使ってハインズのモノクロ写真に色を塗り、この素晴らしい女性を紹介した。



「クラスマート」で紹介したウォートソン氏の話



歴史記憶の継承

アメリカのサンバウド立派病院看護学校を卒業したエヴァ・ハインズ氏は、1912年に中国に渡り、1924年に駿英病院で看護師として勤め始めた。南京大虐殺の間、ハインズ氏は病院で新生児の世話をした。未だの彼女は母親ではなかったが、多くの子供たちの「母」になつた。看護婦の日記の毎日の日、AIを使ってハインズのモノクロ写真に色を塗り、この素晴らしい女性を紹介した。



AIで再現した赤ちゃんの世話をしているハインズさんのカラー写真

訪問者の声

メーデーのS連休中、記念館を訪れた日本人の「畠田」さんから、「日本では最初のアートがここまで詳しく知れていませんが、今日にここに来られて知ることでとてもよかったです。日本人として、こういうことがあったことを忘れないでいきたいです」とのメッセージを書き残した。



現在中国の南航大学で留學中のスペイン人見学者ジオアンさん（中国名：王國知）は、「南京虐殺の歴史を学ぶためにここに来た。第二次世界大戦の歴史をもっと知りたい。私は南京がとても好きだ。記念館はどうも豪華な場所で、平和の大気さを感じてくれる。平和はどの国にとっても大切のことだと思います」と語った。





イベント

中国の伝統的な端午の節を迎え、多くの見学者が歴史を学ぶために記念館を訪れた。このため、記念館は開館時間を延長し、「記憶の声」朗読活動を企画し、特別グループ専用の優先窓口を開設し、問い合わせ電話に迅速に対応してきた。連休の3日間、見学者は「ラーベ日記」を朗読し、歴史を振り返り、犠牲者を偲んだ。中国福建省から来た11歳の官景恒さんは「鉄兜をかぶって日記を書いているラーベさんの銅像を見た後、『ラーベの日記』の朗読に参加し、身の危険を顧みず中国難民を助けるために残ってくれたラーベさんに感謝する。これから歴史を心に刻み、しっかり勉強する」と語った。



2023年12月13日夜、南京紫金草芸術団の児童合唱団60人余りが、オリジナル曲「闇に向かって伸びる紫金草」を歌った。この歌は果てしない悲しみを伝えるとともに、心強さと未来への期待をも聞く側に伝えたい。今年、南京紫金草芸術団児童合唱団は新メンバーを募集し、合唱を通して歴史を学び、小さな平和使者を育むことを目指している。



幸存者の情報

南京大虐殺の幸存者である高如琴さんが5月23日、90歳で亡くなった。高さんは1934年1月生まれ、当時、家族とともに城内で避難する途中、侵入してきた日本軍に小銃で撃たれ、高さんの手を繋いでいる祖母は胸に撃たれて、高さんのそばで即死し、母親の足が撃たれて負傷した。その後、生き残った家族と一緒に難民キャンプに入って避難した。



歴史記憶を受け継ぐ

カナダ時間の6月8日、トロント市内にあるアジア太平洋平和博物館(WongAvery ASIA PACIFIC PEACE MUSEUM)が正式にオープンした。同博物館では、アジア地域における第二次世界大戦の歴史を展示している。展示は「戦前」「日本の軍国主義と侵略」「大虐殺」「日本軍の性奴隸制度」「細菌剤と人体実験」「捕虜虐待および強制連行」「アジアの第二次世界大戦とカナダ」「日本の敗北」「戦後の正義」「記憶と反省の間」の10個のセクションで構成されている。第3セクションでは南京大虐殺に焦点を当てている。中国系カナダ人の王裕佳氏、劉美玲氏たちの20年来の努力によって、この博物館の設立を実現した。



見学者の声

6月21日の午後、南京出身の黄安慧さんとカリフォルニア大学バークレー校の哲学博士課程に在籍するミラン・モゼさんと一緒に記念館を訪れた。ミランさんは、南京大虐殺史実展を見学しながら、思わず涙を拭いていた。彼は「日本軍に刺され、流産した幸存者の李秀英さんを見た時、言葉で表現できないほどの悲しい気持ちになった」と話した。ミランさんはまた、南京大虐殺の歴史はアメリカの歴史事業では学んだことなく、帰国したら記念館で見た史実を友人や家族に伝えたいと語った。今回、黄さんの案内で南京を散策したミランさんは「南京はとても美しく、とてもフレンドリーな街だ」と絶賛した。



| ヘッドライン

当館で中国抗日戰爭勝利80周年記念行事を開催

7月27日午前、当館は抗日戰爭勝利80周年記念行事を開催した。南京大屠殺幸存者の家族代表、小学生代表、見学者代表、記者部、議員代表ら87人が参加した。87年目のこの日、日本軍侵略者は世界に衝撃を与えた建瀬橋事件を引き起こし、それによって中国人の全長抵抗日戦争の序幕が開かれた。



真夏日にサービス最高化で見学者の体験を高める

この夏、記念館が見学のペースを提升了。館内は開設延長(8:30~18:00)や防暑対策の導入、ボランティア活動などを通じて見学者に快適な体験を提供した。



| お別れ

南京大虐殺幸存者石秀英さん死去

南京大虐殺幸存者の石秀英さんが7月12日早朝、98歳で逝去した。石秀英さんは1920年生まれで、1937年の南京大虐殺で母親と一緒に逃げた。その後、夫と結婚して上海で暮らし、夫が死んでからは一人暮らしを始めた。2013年12月6日から11日までの間、石秀英さんは日本の井本、長地、福岡を訪れ、南京大虐殺幸存者証言集会に参加した。



△石秀英さんが骨折病のため左足を切断する手術をした。5月30日午後の講演にて、当館副館長高知尋がお見送りを行った

亡くなつた南京大虐殺幸存者を追悼する演奏式が行われた。

7月18日午後、今年に亡くなった程福宝、陳桂香、劉秉珍、高知尋、石秀英、計五人の生存者の冥福をるために、当館で演奏式を行つた。



△高知尋さんの追悼(左)が高さんの生前の資料数点を当館に寄贈した

南京大虐殺の幸存者高志成さん死去

南京大虐殺の幸存者高志成さんが7月20日、99歳で亡くなつた。高さんは1925年12月23日生まれ、1937年の夏は南京市江寧区葛頤浜附近に隠れ暮らしていた。隠れていた日本兵は彼の祖父を射殺した際、娘は祖父の隕命タトル撮影した頭蓋骨を娘たちに渡された。



| 安け細く

台灣の弁護士が当館に水墨画の蔵書を寄贈

今年で90歳近くになる台湾の弁護士高事翰さんは、1935年に中国に渡り、上海で生活をしました。1948年に3歳で家を出で到着し、その後台北に移りました。大陸との往来が再開後、高さんは百名以上上の台湾で亡くなった老舗の法律事務所の大連(遼寧)ほんじさんため、2012年度「中国を歩いた人」に選ばれた。7月10日、高さんは記念冊子を貰り、日本復古山東美術院(現東京藝術大学)「絵物語考収集」特別展観覧の際、大連の水墨画の蔵書を下山山田和也に贈り、當館の蔵書などを企画的に寄贈した。

記念冊を後にした後は、彼は、終わる深酒しながら、台湾に帰った。台湾の若者に東京大事件の歴史を知ってもらうために、学校に行つて話をしたいと持つた。



△高事翰さん(左)が大切な資料を当館館長

周峰に寄贈した

| 心の声

日本「平和の旅訪中団」が当館を訪問

7月14日午後、日本「平和の旅訪中団」が当館を訪れた。その訪問は4回目の訪問となりました。

団長青木樹次さんは、現在の日本の憲法改憲強行の姿を肯定する流れの意見を示しました。今回の訪問で、団員たちと一緒に、日本憲法改修の問題について議論し、日本政府の立場を理解する形で、議論的に話し合い、対話を重ねましたと語りました。「自己の眞実をさす、学識をもじり、意見が争はれるのが争い止まる」とは私たちの要を述べた。意見を尊重する文化が尊重されるのを心に持つことであり、意見を否定しないことは本来の平和のためだと語りました。



△青木樹次長(左)に団誌を贈りする当館館長

周峰(右)



イベント

八月十五日「日本の無条件降伏79周年」記念活動

8月15日午前、日本の無条件降伏79周年を記念するイベントが当館で行った。南京大虐殺生存者の子孫代表、南京の青年代表、大学生ボランティア代表、雲南省山間部の青年代表など50人が参加した。参加者全員が映画「降伏へのカウントダウン」を見た後、抗日戦争元兵士たちの手形の模様のところで、勝利を表す巨大な「V」の形をしたバナードに手形を押した。

南京大虐殺の生存者・夏淑琴の曾孫である李玉翰さんは「歴史の悲惨な記憶を忘れてはならない。生存者の子孫として、南京大虐殺の歴史の記憶を継承し、戦争に反対し、平和を大切にする役割を果たしたい」と語った。



第二回若手研究者南京大虐殺史シンポジウムが開催

8月9日、南京で「新しい史料と新ビジョン——第二回若手研究者南京大虐殺史シンポジウム」が開催された。国内外20の大学から30名近くの若手研究者が参加し、南京大虐殺、日本の中国侵略戦争、国家追悼式、戦後の調査と裁判、佛國政府研究などをテーマに学術討論を交わした。



心のケア

医療関係者と共に生存者を訪問

8月17日、記念館は南京侵華日軍被害者援助協会、江蘇省人民医院のスタッフと共に生存者の黄桂蘭さん、馬庭宝さん、王義隆さんの自宅を訪問した。医者さんが生存者の血圧、血糖値を測定し、最近の健康状態を問診した。

2018年から、この医療サービスを定期的に生存者に提供し始めた。また、生存者の健康を守るために、病院で治療を受ける際に優先窓口などの利用もできるようになっている。



受け継ぐ

アイリスト・チャン氏を記念するビデオ作品『あの夏に戻る』を公開

1995年夏、中国系アメリカ人作家のアイリスト・チャン氏は、南京大虐殺の歴史の真実を明らかにするために南京を訪れ、南京でビデオカメラを回して貴重な映像を撮り残した。氏は南京大虐殺の史料を丹念に探し、多くの生存者にインタビューを行い、帰国後に膨大な取材メモと録音を整理し、『ザ・レーベ・オブ・南京』を執筆した。同書は南京大虐殺60周年にあたる1997年に出版され、第二次世界大戦中に日本軍が南京で行った残虐行為を暴き出し、欧米諸国では強い反響を呼んだ。

今年はアイリスト・チャン氏の20年祭。記念館は「あの夏に戻る」と題したビデオ作品を作成して公開することになった。